

人造人間事件

海野十三

青空文庫

理学士帆村莊六は、築地の夜を散歩するのがことに好きだった。

その夜も、彼はただ一人で、冷い秋雨にそぼ濡れながら、明石町の河岸から新富町の濠端へ向けてブラブラ歩いてきた。暗い雨空を見あげると、天国の塔のように高いサンタマリア病院の白聖ビルがクツキリと暗闇に聳えたっているのが見えた。このあたりには今も明治時代の異国情調が漂っていて、ときによると彼自身が古い錦絵の人物であるような錯覚さえ起るのであった。

通りかかった火の番小屋の中から、疝高い浪花節の放送が洩れてきた。声はたいへん歪んでいるけれど、正しく蒼竜斎膝丸の「乃木將軍墓参の旅」である。時計の針は九時を廻って、九時半の方に近づきつつあるものらしい。さつき喫茶店リラで紅茶を啜っていたときには、八時からの演芸放送のトップとして、ラジオドラマ「空襲葬送曲」が始まったばかりのところだった。

葬送曲だの墓参だのと不吉なものばかり並べて、放送局も今夜はなんと智慧のないプログラムを作ったのだろう。然し不吉なものが盛んに目につく時は、その源の必ず大きな不吉が存在しているものだ。帆村はそれを思つてドキンとした。

(———なにか、血^{ちなまぐさ}腥い事件が起つたのだろう。殺人事件か、それとも戦争か)

さつき喫茶店リラで、紅茶を啜りながら聴くともなしに聴いたラジオドラマは、将来戦を演出しているものだった。東京市民は空襲警報にしきりと脅え、太平洋では彼^{ひが}の海戦部隊が微妙なる戦機を狙つているという場面であつた。戦争は果して起るのであろうか。

帆村理学士は濠端に出た。冷い風が横合からサツと吹いてきた。彼はレーンコート^{えり}の襟をしつかり掻きあわせ、サンタマリア病院の建物について曲つた。

病院の大玄関は、火葬炉^{まえじ}の前戸のように厳めしく静まりかえり、何処かにシャーリー・テンプルに似た顔の天使^{かす}の微かな寢息が聞えてくるような気がした。道傍^{みちばた}には盗んでゆかれそうな街灯がポツンと立っていて、しつぽり濡れたアスファルトの舗道に、黄色い灯^ほ影^{かげ}を落としていた。

そのときだった。一台の自動車が背後の方から勢よく疾走してきた。帆村は泥しぶきをかけられることを恐れて、ツと身体を病院の玄関脇によせた。

すると自動車は、途端にスピードを落として、病院の玄関前にピタリと停つた。彼は見た。自動車の中には、中腰になつて、洋装の凄艶なマダムとも令嬢とも判別しがたい美女が乗つていた。しかしなんとという真青な顔だ。

「うむ、なにかあつたな」

帆村はドキンとした。

女は濃いグリーンの長いオーヴァを着ていた。車を返すと、非常に気がせくらしく、受付の呼鈴にとびつくようにして鈕を押した。

「ハロー、ウララさん。いまごろどうしましたか」

突然奥の方から外国なまりのある男の声がした。見ると丁度このとき、病院の中から一人の若い西洋人が医師の持つ大きな鞆を抱えて現れた。

「おおジョン。まあよかつた。あたし、貴方に会いにきたところよ。とっても大変なことが起つたわよ」

「大変なこと？ 大変というとどんな大変ですか」

「今家に帰つてみるとあの人が死んでいるのよ。あたしどうしましょう」

「おう、あの人が——あの人が死にましたか。私、すぐ診察に行きましようか」

「診察ですつて、まあ。そんなことをしてももう駄目ですわ。あの人の頭は石榴ざくろのように割れているんですもの」

「石榴という」と

「滅茶滅茶めっちゃめっちゃになつて、真赤なんです。トマトを石で潰したように……」

「おおそれは大変！　どんな訳で、そんなひどい怪我をしたのですか」

「どうしてですつて」女は意外だという面持で、外人の顔を見上げた。

「……貴郎あなたの御存知ないことを、どうしてあたしが知っているものですか」

と声をおとした。

ジョンと呼ばれる外人は、ずり落ちそうになつた折靴を抱えなおした。

「ウララさん。もしやあの人は、何者かに殺されたのではないのですか」

「まあ……」と女は愕おどろいて「もちろん殺されたに違いありませんわ。あたし、これからど

うしましょう」

ジョンは黙つて立つていた。

ウララは苛いらいら々とした様子で彼の腕に手をかけ、

「ねえジョン。あたしはもう決心しているのよ。こうなつては仕方がないわ。さあ、これ

からすぐに、あたしを連れて逃げて下さい」

と、彼を揺すぶった。

ジョンは、またずり落ちそうになった鞆を抱えなおしてから、ウララの肩に手をかけ、「ウララ、お聞きなさい。逃げることは、もつと後にしても遅くはありません。それよりも、あなたの家に行ってみましょう。死体の始末がうまく出来ればいいでしょう。さあ、急ぎましょう」

二人が玄関から出てくる気配なので、柱の蔭に隠れていた帆村はハッと愕いた。咄嗟とつさに彼は、壁にピタリと身体を密着させた。二人はついにそれには気づかず、スタスタと雨の中に急ぎ足に出ていった。

それと入れ違いに、受付の窓が開いて、看護婦が顔を出した。

「アーラ、やっぱり誰も居やしないわ。だから、あたしはベルなんか鳴りやしないと云つたのに」

帆村は雨に濡れてゆく背丈のたいへん違つた男女の後を巧みに追つていった。二人は濠端へ出たが、自動車にも会わず、そのままドンドン向うへ歩いていった。そして新富橋の上にかかたとき、女はハツとした様子で立ち停つた。

女は向うを指した。

「アラ、窓に灯がついているわ。誰もいない筈なのに」

橋を越えて、濠添いに右へ取つていったところに、人造人間の研究で知られた竹田博士研究所が聳えている。女は明らかにその家の窓を指しているのだった。

二人は急ぎ足となつた。そして一度追いついた帆村を、また追いつかえて、濠端を駛つた。

門前ちかくにまで進んだ二人だつたけれど、何を見たのか俄かに急いで引返してきた。帆村は面喰つた。しかし本当に面喰つたのは二人の方らしかつた。男は女を後にかばつてツと濠端に身を引いた。外人の大きな拳が長いズボンの蔭にブルブルと呻っているのが判つた。帆村はジロリと一瞥したまま、平然と二人の前を通りすぎた。彼は後の方で、

深い二つの吐息といきのするのを聞いた。

帆村は構わず、竹田博士研究所の門前に近づいた。石段の上に、玄關の扉が開け放しになつていて、その奥には電灯が一つ、荒涼こうりょうたる光を投げていた。しかし人影はない。

彼は構わず石段をのぼつていった。石段を上りきつたと思つたら、

「こらツ」と大喝だいかつ一声、塀のかけから佩劍はいけんを鳴らして飛びだしてきた一人の警官！
帆村の頸くびつ玉をギュツとおさえつけた、帽子が前にすつ飛んだ。

「まあ待つて下さい。帆村ですよ」

「なんだ、帆村だとオ。——」警官は愕いて彼の顔を覗のぞきこんで「——やあ、これはどうも失敬。帆村さん、莫迦ぼかに嗅かぎつけようが早いじゃありませんか」

「なアに、この辺は僕の縄なばりなんでネ」

といつて彼は笑つた。帆村理学士といえど道楽半分に私立探偵をやっていることで警官仲間によく知れわたつていた。彼の学識を基礎とする一風変つた探偵法は檢察当局にも重宝ちゆうぼうがられて、しばしば難事件の応援に頼たのまれることがあつた。かれは有名な悪口家わるくちやで、事件に緊張している下ツ端したの警官たちの頤あごを解く妙法を心得ていた。

「ねえ君。これは逃げた桌ふくろでも捕とらえる演習えんじゆしているのかネ」

「冗談じゃありませんよ。この主人が殺られたんですよ」

「ほう、竹田博士殺害事件か。それにしてはいやに静かだねえ。国際連盟は押入から蒲団でもだして、お揃いで一と寝入りやっているのかネ」

「じよ、冗談を……」

といているところへ、表に自動車のエンジンが高らかに響いて、帆村のいう所謂国際連盟委員がドヤドヤと入ってきた。雁金検事、丘予審判事、大江山捜査課長、帯広警部をはじめ多数の係官一行の顔がすっかり揃っていた。「お、帆村君、もう来ていたか。電話をかけたが、行方不明だということだったぞ」

と、雁金検事が、彼の肩を叩いた。

「いや貴官がたが御存知ないうちに、うちの助手に殺人現場を教えとくのは失礼だと思いましてネ」

と帆村は挨拶を返した。

「さあ、始めましょう」

大江山課長は先登に立つと、家の中に入っていった。帆村も一番殿りからついていった。

階段を二つのぼると、三階が博士の実験室になっていた。そこはただっ広い三十坪ばかりの部屋だった。沢山の器械棚が壁ぎわに並んでいた。隅には小さい鉄工場ほどの工具機械が据えつけてある。それと反対の東側の窓ぎわには紫色の厚いカーテンが張ってあって、その上に大きな寝台があり、その上に竹田博士の惨死体^{ざんしたい}が上を向いて横たわっていた。

係官は、博士の死体のまわりに蝟集^{いしゅう}した。実に見るも無惨な死にざまであった。顔面はグシャグシャに押し潰され、人相どころの騒ぎではなかつた。もし赤い血にまみれ一本ピンと立った頤髯^{あごひげ}の根もとに、ひとつかみほどの白毛^{しろが}を発見しなかつたら、これを博士と認知するのが相当困難であつたらう。竹田博士は年齒^{ねんし}僅かに四十歳であるのに、不精^{しやう}から来た頤髯を生やしていたが、どういふものかその黒い毛に交^{まじ}つて、丁度頤の先のところ^{しやう}に真白なひとつかみの白毛が密生していること^{しやう}で有名だった。

帆村は、竹田博士の死体をちよつと覗いていただけで、間もなく鳩首^{きゆうしゆ}している係官の傍を離れた。そして彼は、室内を改めてブーツと見廻したのであつた。

そのとき彼の眼についたのは、器械棚と並んで大きな棺桶を壁ぎわに立てかけたような函^{はこ}の中に納まっている鋼鉄製の人造人間であつた。それは人間より少し背が高く中世紀の騎士が、ふたまわりほど大きい甲冑^{かちゆう}を着たような恰好をしていて、なかなか立派なも

のであった。そして頤の張った顔を正面に向け、高い鼻をツンと前に伸ばし、その下に切り込んだ三日月形の口孔こうこうの奥には高声器が見え、それから円つぶらな二つの眼は光電管できていた。また両の耳は、昔流はや行つたラジオのラツパのように顔の側面に取りつけられ、前を向いたラツパの口には黒い布きれで覆いがしてあった。

人造人間に近づいて、しばらく見てみると、どこからともなくギリギリギリという低い音がしているのに気がついた。

「オヤ」

と思つた帆村は、試みに人造人間の鋼鉄張こうてつぱはりの胸に、耳を押しつけてみた。すると愕いた事にヒヤリとするだろうと思つた鉄板が生暖く、そしてその鉄板の向うにギリギリギリという何か小さい器械が廻まわっているらしい音を聞きとることができた。

「ほう、この人造人間は生きているぞ」

彼は目を瞠みはつて、改めてこの人造人間を眺めなおした。そのとき彼は、実に愕くべき発見をしたのだつた。

「呀あッ！ 血だ、血だッ。人造人間の拳こぶしに、血が一杯ついている！」

帆村の愕きの声に、係官の一行は、函に入った人造人間の前にドヤドヤと集ってきた。

「ナニ血がついているつて。おおこれはひどい」

「やあ、函の底にも、血痕が垂たれている。おう、ちよつと函の前を皆、どいたどいた」
血痕と聞いて、一同、爪つまやじき先だつて左右にサツと分れた。

「ホラホラ。ここにもある、ウム、そこにもある。血痕がズーツと続いているぞ」

「なアんだ、寝台のところまで、血痕がつながっているじゃないか。すると、——」

「すると、この人造人間めが、博士を殺やつたことになる……のかなア」

「えッ、この人造人間が殺害犯人とは……」

一同は慄りっぜん然としてその場に立ち竦すくみ、この不気味な鋼鉄の怪物をこわごわ見やった。

人造人間は、ピクリとも動かなかつた。しかしまた、今にも一声ウオーツと怒号どごうして、函の中から躍り出しそうな気配にも見えた。

「皆さんはまさか、こんな鋼鉄機械が一人前の靈魂を持っていると決議なさるわけじゃありませんまいネ」

と、帆村が横合よこあいから口を出した。

「さあ、そこまで考えているわけじゃないが、とにかくこの人造人間の右の拳には博士の顔を粉碎したかもしれない証跡しょうせきが歴然と残っている」

と検事は云った。

「こいつが生きている人間だったら」と大江山課長は人造人間を指ゆびさしていった。

「私は躊躇ちゆうちよなく、こいつを逮捕しますがネ。しかし真逆まさか……」

「そうだ。だからわれわれは、この人造人間が博士を殺害してこの函の中に入ったまでの運動をなしとげたことを証明できればよいのだ。だがこの人造人間が果して動くものやら動かないものやらわれわれには一向分っていない」

「なアに雁金さん。こいつが動くことだけは確かですよ。今こいつの腹の中では、機械がしきりにゴトゴト廻っているのですよ。誰かこの人造人間に命令することができればいいのです。見わたしたところ貴官など最も適任のように心得ますが、一つ勇しい号令をかけてみられては如何ですか」

と帆村は手を前にのばした。

雁金検事は、すぐ顔の前で手をふった。

そのとき大江山課長が進みでて、

「こういつまでも、訳のわからない機械を相手にしていたのでは始まりませんから、いつもの手口の方から調べてゆきたいと思いますが、いかがでしょう」

「それもいいですね」と検事が同意した。

「そうなるよ、まずこの家の家族なんですが、夫人のウララ子が見えません。ばあやのお峰というのは、この事件を知らせて来たので、いま警察に保護してあります。ばあやは耳がきこえないのですが、夫人が外出先から帰ってきたので、お茶を持って上ってきたときに、夫人が入っていたこの部屋の中で惨劇さんげきをチラリと見たのだそうです」

「ウララ夫人は、いつ帰宅したんですか」

「ばあやの話によると、今夜八時をすこし廻ったときだったといえます」

「すると博士が死体となった鑑識時刻とあまり違わないネ。その夫人が、今家に居ないし、警察へ届出もしないというのはどうもおかしい」

と検事は首を傾かしげた。帆村はそれを聞いていて、なるほどさっきのあれがそうだなと肯うなず

いた。

「もう一人、この家によく出入りしている人物が居るのです。それは戸口調査で分つて居るのですが、馬詰丈太郎まづめじょうたろうといつて、博士の甥おいに当る男です。彼は一ヶ月前まではこの家の中に同居していたんだが、今は出て五反田こたんだ附近のアパートに住んでいます」

「その甥の馬詰というのにもなにか嫌疑けんぎを懸けることがあるのかネ」と検事はたずねた。

「彼は亡なくなつた博士の助手をして、永くこの部屋に働いていたのです。しかしどっちかという、彼は怠なけ者で、いつも博士からこつぴどく叱なられていたということです。これもばあやのお峰の話なんですがネ。そして彼が博士の家を出るようになった訳は、どうもウララ夫人によこしまな恋慕れんぼをしたためだという話です」

「なるほど、そいつは容疑者のうちに加えておいていいネ」

そういつているところへ、階下から一名の警官がアタフタと上つてきた。そして一同の前にキチンと姿勢を正して披露した。

「只今、馬詰丈太郎が門前を徘徊はいかいして居りましたので、引捕えてございます」

「おおそれは丁度いい。早速さつそくその軟派の甥を調べてみようと思ひますが、如何で……」
そういう大江山の言葉を、雁金検事はすぐに同意した。

やがて博士の甥の丈太郎が、警官に護られて、階段の下から姿を現わした。彼は氣障きざではあるが思いの外キチンとした服装をしている瘠やせ型の青年だった。

丈太郎は伯父の死体を見ると、ハラハラと涙なみだを滾こぼした。そして後をふりかえって係官の前にツカツカと進むより、ヒステリックな声で喚わめきたてた。

「だ、誰が、この善良なる伯父を殺したのです。ああ僕が心配していた事が到頭とうとう事実になつて現れたのです。だから僕は伯父さんの所から出てゆくのに気が進まなかつたんです。さあ、早く犯人を逮捕して下さい」

検事と課長とは、ちよつと顔を見合せた。

「オイ丈太郎。君はなかなか芝居がうまいようだが、その手に乗るようなわれわれでないぞ」

と、大江山は一喝をくらわせた。

「なにが芝居です。そんなことを云う違ひまがあつたら、なぜ貴方がたはもつと大局に目を濺そそがないのです。貴方がたの不注意で、いま国家のために懸けがえのない人造人間研究家が殺害されたのです。国家の大なる損失です。伯父に匹ひつてき敵する研究家が、わが国に一人でも居ると思うのですか」

これには大江山も参つてしまった。かねがね竹田博士の身边を保護する必要のあることを考えないではなかつた。しかしいろいろな手不足のため、心配していながらも、博士の保護を實踐しなかつたことは確かに手落ておちである。

大江山が敗色濃いのを見てとつて、雁金検事が代つて丈太郎にたずねた。

「すると君は、外国のスパイかなんかのことを云つていようだが、なにかそんな話を知つているのかネ」

「そんな話は、こつちで伺うかがいたいくらいのもですよ。しかし私だつて、すこしは気がついていますよ。この向うのサンタマリア病院の内科医ジョン・マクレオなんざ、ずいぶん奇怪な行動をしているじゃありませんか。僕は向うの国の興信録をしらべてみましたが、医者としてマクレオの名なんか見当りませんよ。それにあいつの目の鋭いことはどうです。

彼奴は物差こそ持つていないが、ひと目睨めば大砲の寸法も分つちまうという目測の大家に違いありませんよ。あんな奴が、帝都の白昼を悠々歩いてゐるなんざ、全く愕きますよ」

（そうか。あのジョン・マクレオという内科医が、そうなのか）と帆村は胸の中で自ら問い自ら答えた。それこそ、今夜、あの病院の玄関でウララ夫人を擁していた男に違いない。検事はそこでギロリと眼を光らせ、傍に馬のような荒い鼻息をたてている帯広警部の太い腹について云つた。

「——サンタマリア病院のジョン・マクレオだ。現場不在証明を調べること」

警部は返事の代りに、お尻のポケットから手帖を出して書きこんだ。

馬詰丈太郎は煙草を一本口にくわえて、いささか得意げであつた。

「オイ馬詰」と突然叫んだのは大江山捜査課長であつた。

「他人の話なんか、お前に聞かされないでもいいんだ。それよりお前の現場不在証明を聞こうじゃないか。博士の殺害された今夜の八時前後、お前は一体何処にいたんだ。それを云え」

「私が何処にいたというのですか、折角ですが、それは別に御参考にはなりませんよ」

と丈太郎は自信たつぷりだった。

「くわしくいうと、私は今夜七時三十分から八時五十分までJ O A Kにいましたよ」

「なんだ放送局にか。そこで何をしていたんだ」

「なにつて……」と彼は答えるのをやめて、煙草を口に持っていつて美味おいしそうに喫すった。

「A Kの文芸部に訊きいてごらんになれば分りますよ。つまり早くいうと、私の書いたラジオドラマが今夜八時から三十分間、放送されたのです。出演者はP C Lの連中でしたがネ。そんなわけで私はずっとA Kのスタディオにつめていたんです。なんなら貰もらって来た原作ならびに演出料の袋をお目にかけてもいいのですが」

「あああの『空襲葬送曲』というやつですネ」

と帆村が横よこ合あいから口を出した。

「そうです。お聞き下さったですか」

「ええ聞きましたよ。なかなか面白かったですよ。あの地の文章を読んでいたのは、千葉ちば早智子さちこですか」

「ええええそうです。どうかしましたか」

「いや、今夜はお早智女史、いやに雄壮な声を出していましたネ」

「それはそうでしょう。戦争ものですからネ。緊張するのも無理はありません」

二人は事件をそっちのけにして、ラジオドラマの話に熱中していた。

こつちでは大江山課長が雁金検事の前に近づいていった。

「ウララ夫人を早く捜しださにやいけませんネ。一度外から帰って来て、死んでいる博士をそのままにして外へ出たという行動は腑ふに落ちませんネ。警察とか医師とかにすぐ電話すべきが本当ですからネ」

「君、あの留守番のばあやは大丈夫かネ」

「あああれは大丈夫ですよ。老人なんで、なにが出来るものですか」

「しかし君、人造人間が博士を殺したことが分れば、そんな生きた人間を調べても何にもならんじゃないか」

「いや、人造人間に靈魂がない限り、これは生きた人間の仕業しわざに違いありませんよ」

「うん、この点をハッキリしたいんだがネ、どうも機械にかたというやつは、苦手にがてだ。この人造人間がどうして動くかということがハッキリ分るといいんだが。そうだ、帆村に調べさせよう」

「それがいいですね」

そこで帆村が呼ばれて、この人造人間はどうして動くかを調べるように命ぜられた。

「さあ僕にも、まだ分つてはいないが、馬詰丈太郎氏は、博士の助手を永らくしていたというから、一つ訊いてみましょう」

帆村は馬詰をつれて、人造人間の前へいった。そしてどうすれば動くかと訊ねた。

「そうですね。僕はこの新型の人造人間については知らないのだが、一つ中を開けて見てください」

そういつて彼は物慣れた手つきでドライバーを手にとり、人造人間の胸中をしめつけている鉄扉てつびのネジを外はずしていった。間もなく人造人間の脇はらわたが露出した。脇はらわたといつても人造人間のことだから細こまごま々とした機械がギッシリ詰つていて、その間を赤青黄紫と色とりどりの紐ひもせん線せんが縦横無尽に引張りまわされているのであった。なんとという複雑な構造だろう。

竹田博士の素晴らしい脳力のほどがハッキリ窺うかがわれるような気がした。ことに帆村たちの注意を引いたものは、下腹部に置かれた電池からの放電により、心臓部附近に小さい赤電球と青電球とがチカチカと代り番に点滅し、そして大小いくつかの歯車が、ギリギリギリと精確に廻転している光景だった。靈魂はないにしても、この機械人間の心臓も肺臓も、まさにチャンと活動しているのであった。

「——こつちが増幅器で、こつちが継電器ですよ」と馬詰はドライバーの先で機械を指した。

「これが身体を直立させるジャイロです。こつちが腕を動かす電磁石装置でんじせき。こつちのが脚の方です。左右二つに分れていますでしょう。首の方もついでに解剖してみましよう」

馬詰は医学者のようにいとも無造作に、人造人間の鉄仮面を剥はぎとった。

「ほら、これが口の代りになる高声器です。ほほう、この人造人間は目が見えませんよ。光電管がついていますけれど、電線が外れています。これが耳の働きをするマイクロフォン」

「ちよつと待つてくれたまえ」と帆村が手をあげた。

「するとこの人造人間はどうすれば動くかといえは、結局このマイクに何か信号音を送つてやればいいのだネ」

「まあ今のところ、機械の接続はそうなっていますね」

「ハハア——すると、どんな信号音を送つてやれば、どんな風に動くかという人造人間操縦信号簿といったようなものがなければならぬ。さあ皆さん。その辺を探してみして下さい」

「よよし、人造人間操縦信号簿か。——」

そこで係官の指揮で、刑事たちは一勢に部屋の中を宝捜しのように匍はいまわった。

「あッ、これじゃないかなア」

一人の刑事が、機械戸棚と後の壁との間に落ちこんでいる一冊の薄い帳面をみつけて摘つまみだした。

その帳面の表紙には「ロボットQ型8号の暗号表」と認しためてあつた。

「うむ、Q型8号とは、この人造人間ですよ。ホラ、その鉄てつ枠わくの上にペンキで書いてある」

係官は、その暗号表を引張りあいながら覗のぞきこんだ。

「ほうほう、荒天——首ヲ左ニ曲ゲル。魚雷——首ヲ前後ニ振ル。なるほど、いろんな暗号が書いてあるぞ。偵察——『時間ガ来タ』ト発言スル。滑走——膝ヲ折ル。……これで見ると、人造人間を動かす号令は、短かい単語ばかりだ」

「これを見ると、号令単語は四、五十もありますね」

「オヤ、これはおかしい。どうも変だと思つたら、暗号表が一枚、ひき破られているよ。うむ、これは重大な発見だ。おい皆、破れた暗号表の一枚を探してみろ」

刑事たちは課長の命令で、再びその辺を丹念に捜してみた。しかし彼等はずいぶんそれを

捜しあてることができなかつた。

「どうも、ないようですよ」

「そうか。ウム、よしよし。それで分つたぞ。やっぱりこれは人造人間に靈魂があつたわけではなく、やっぱり生きている人間が、この人造人間を示唆しそしたのだ。犯人はその暗号表を持つてゐるのに相違ない」

大江山課長は、決然と云い切つた。

とにかく博士の居るこの部屋で、誰かが人造人間に号令をかけたのに相違ない。それが誰だか分れば、この事件は解決するのであつた。さあ、誰がこの部屋に入って、号令することが出来るか。

ウララ夫人であろうか。馬詰丈太郎だろうか。または怪外人ジョン・マクレオ医師であろうか。それとも外の人物だろうか。

ばあやにつき調べてみると、博士はいつも七時から七時半までを夕食の時間にあて、それが済むと一服の睡眠剤をのみ、今博士の死体が横たわっているベッドにもぐりこんで九時半まで丁度二時間というものを熟睡して、その後深夜に続く研究の精力を貯たくわえるのが習慣になつてゐるそうである。

すると今夜も博士の夕食後の睡眠中に、何者かがこの部屋に忍びよって、人造人間の前に死の呪文じゆもんを唱えたとなに違いない。博士殺害の手段は、ようやく臃氣おぼろげながらも見当がついて来た。

「さあ、誰が号令したのだろう」

係官は鳩首きゆうしゆ協議した。

「この上は、関係者を全部検挙して、そのアライを確かめるより外ありませんネ」と大江山は云った。

そのとき帆村探偵は、部屋の片隅に腰を下して、例の暗号表を幾度も熱心に読みかえしていた。

5

その翌日の午後、帆村探偵は雁金検事のもとへ電話をかけた。

「いやあ、昨日はどうも、いかがです、博士殺しの犯人は決まりましたか」

「ウン、決つたとまでは行かないんだが、重大なる容疑者を捕^{つか}まえて、今盛んに大江山君が訊^{じん}問^{もん}している」

「それは誰ですか」

「ウララ夫人だよ」

「えッウララ夫人？ 夫人はどうとう捕つたのですか。どこに居たのですか」

「なあにサンタマリア病院に入院していたのだよ。別に大した病気でもないのだがネ」

「するとあのジョン・マクレオは怪しくないのですか」

「マクレオは午後二時から午後九時半までずっと病院にいたことが分つた。あの外人の現^ア場^リ不在^バ証明^イは完全だ」

「そうですか。馬話丈太郎も完全なのでしよう」

「そうだ。あの男は放送局に居たことが証明された。結局残るのはウララ夫人と、耳の聞えないばあやの二人だ。ばあやはウララ夫人が外出から帰つてのち、使いに山の手までやられたのだが、その足で警察へ駆けこんだ。ばあやは博士が殺害されるとき、あの家に居たことは疑う余地がない。しかしばあやは口がきけない。犯人がもし人造人間に号令をか

けたものとすればあやは犯人であり得ない」

「なるほど、するといよいよウララ夫人という順番ですかネ。ウララ夫人の帰宅と、博士の殺害と、どっちが早いのですか」

「さあ、それが判然しない。君も知っている通り死体検索から死期が推定されるが、二十分や三十分のところは、どうもハッキリしないのでネ。……とにかく大江山君もウララ夫人の剛情ごうじょうなものには参ったといつて滾こぼしているよ」

「どうも僕には、夫人が博士を殺したような気がしないのですよ。夫人はあの外人と、密ひそかな邪恋じやれんに酔っていたでしょうが、いまのところ博士は無能力者であり、自分は誰にも邪魔されず研究していられたりやいいのであって、その点、妻君の自由行動をすこしも遮さまたげていないのです。そのウララ夫人が急に博士を殺すとは考えられませんね」

「オヤオヤ、君も反対論を唱えるんだネ」

「ほう、すると外にも反対論者が居るのですか」

「そうなんだよ。私もそのお仲間だ。私はむしろジョンの行動に疑念をもつ。なにかこう近代科学をうまく利用して、サンタマリア病院に居ながら、五、六丁はなれたところに住んでいる竹田博士を殺害する手はないものかネ。私はこの点、君の応援を切に望むものな

んだよ」

帆村は雁金検事の突飛とつびな思いつきを訊いてギクリとした。さすがは歴代検事のうちに、バケモノという異称たてまつを奉られ、人間ばなれのした智能あるじを持った主と畏敬いけいせられている彼だけあって、その透徹した考え方には愕くのほかない。たとえそれが科学的に実行できないことにしろ、彼の鋭い判断にはブツリと心臓を刺されるの想いがあつた。

帆村探偵は、かえす言葉もなく、電話を切つた。

考えてみると、まことに残念でもあり、奇怪な事件である。彼は時計を見た。丁度午後二時である。彼は昨夜の現場へ再び行つてみることにした。

河岸かしぶちの博士邸をめぐつて、どこから集つたのか弥次馬が蝟いしゅう集あつしていた。彼等の重かさなりあつた背中を分けてゆくのにひと苦勞きわをしなければならなかつた。

邸内の警戒は、昨夜よりも嚴重きわを極めていた。彼は見知りごしの警官に挨拶をして、三階の広間へトントンと上つていった。

「ほう、君はまだ非番にならないかネ」

と、帆村は昨夜から顔を見せている警官に云つた。

「駄目なんですよ。私が最初にここへ来たものですから、現場を動けないことになってい

ます。もつともときどき交代で、下へ行つて寝て来ますがネ。お得意の手で早く犯人を決めて下さいよ、ねえ帆村さん」

「ウフ、そのお得意のお呪いまじなをするために、こうしてやつて来たわけなんだよ。だが、どうも人殺しのあつた部屋というのは、急に陰気に見えていけないネ。なんとこれは……」

といつているとき、——そのときだった。突然大きな声が、部屋中に鳴りひびいた。

「ええ、後場ごばの市況しきやうでございます。新鐘しんかね……」と、細い数字が高らかに読みあげられていった。それはラジオの経済市況ほかに外ならなかつた。

「——君、ラジオの経済市況まぎなんかで、寂しいのを紛まぎらしているのかネ」

警官はムツとした顔つきで、

「じよ、冗談じゃありませんよ、帆村さん。経済市況で亡霊ぼうれいを払いのけることができますものですか。このラジオは勝手に鳴っているんです。とても騒々そうぞうしいので、私はむしろ停めたいのですけれど、課長からすべて現状維持とし、何ものにも手をつけるなどいうので、その儘ままにしてあるんですよ」

「えッ、現状維持を——するとラジオは昨夜ゆうべから懸かけつ放ばなしになつていたのか。しかし変だなア、昨夜ここへ来たときは、ラジオは鳴つていなかつたが……」

「それはそうですよ。貴方がたのお見えになったのは、もう十時ちかくでしたものネ。ミナサン、ゴキゲンヨクオヤスミナサイマセを云ったあとですよ。私は今朝ねむ睡いところを、午前六時のラジオ体操に起され、それからこつちずうつとラジオのドラ声に悩まされているのですよ。御親切があるのなら、課長に電話をかけて下すつて、ラジオのスイッチをひねることを許してもらつて下さいよ」

「そうか。そいつは素敵な考えだツ」

「ええ、スイッチをひねることが、どうしてそんなに素敵だというんですか」

と警官は愕きの目をみは睜つた。

帆村はそれには答えず、帽子をつかむと、その部屋を飛びだした。警官は後を見送り、「ああ帆村さんもいい人なんだが、どうもちとこのところへ来ているようだよ。可哀想に」

と、耳の上を人指し指でおさ抑えた。

それから十五分ほど経つた。

博士邸の門前は、にわか騒がしくなつた。警官が硝子窓ガラスから下を覗のぞいてみると、雁金検事や大江山捜査課長などのお歴々がゾロゾロ自動車から降りてくるところが見えた。

「おやおや、また連盟会議か」

一行は階段をドヤドヤと上つて来た。

「どうした、帆村君は。まだ放送局から帰つて来ないかね」

「ええ、放送局ですつて。……別に放送局へ行くともなんとも聞きませんでした」

「おおそうか。まあいい。そうかそうか」

一行は、なんだか嬉しそうな顔をして、時刻のたつのを待っているという様子だった。

帆村が再び姿を現したのは、それからなお三十分ほどして後のことだった。彼は右手に藁半紙を綴じたパンフレットのようなものを大事そうに持っていた。

「やあ皆さん、お待たせしました。やつと一部だけ見つけてきましたよ。文芸部長の書類籠の中にあつたやつを貰つてきたんです」

と、そのパンフレットを目の上にさしあげた。

一同は呆気にとられている形だった。

「——さあいいですか。表状を読みますよ。十一月十一日AK第一放送、午後八時より同三十分まで、ラジオドラマ『空襲葬送曲』原作並に演出、馬詰丈太郎——とネ。これは全
国中継です」

と云つて彼は、パンフレットの頁ページを一枚めくつた。

「いよいよこれから実験にかかりますが、皆さんこつちに寄つていて下さい。それから博士の死体のあつた寝台の上には、誰方だれなたかオーバーと帽子を置いて下さい」

雁金検事のオーバーと、大江山課長の制帽とが、白布しろぬのを蔽おほつた空寝台の上に並べて置かれた。それは竹田博士の死体と同じ位置に置かれたことはいうまでもない。一行はこれから何事が起るか、唾つばをのんで、帆村の一挙一動に目をとめた。

「さて——これから、ラジオドラマの台本だいほんを読んでゆきます。なにごとが起つても、どうかお愕おどろきにならぬように」

そういつて彼は、部屋の中うちに突立つて、大声で読みあげていつた。見ていると彼はそれを函はこの中の人造人間に読み聞かせている様であつた。然し鋼鉄人間はピクンとも動かない。

帆村はジエスチユアまじ交りで、一語一句をハッキリ読みあげていつた。彼は昔、脚本朗読会に加わつていたことがあつたとかで、なかなかうまいものだった。

一座はシーンとして、東京が敵国の爆撃機隊に襲撃されるくだりを聞き惚ほれていた。すると第一場第二場は終つて、次に第三場を迎えた。それは太平洋上に於ける両国艦隊の決

戦の場面であつた。

「太平洋上、決戦ハ迫ル——」と帆村は高らかに叫んだ。

「西風ガートキワ強クナツテキタ——」

と地の文章を読む。これは昨夜、千葉早智子がたいへん気取つて読んだところだ。

「……海面ハ次第二浪立ツテキタ」

呀ッという声が、一座の中から発した。

「おお大変だ。人造人間が動きだしたぞ」

「こつちへどいた」

ガチャンガチャンと金属音を発して、人造人間は函の中から一步外に出た。まるで魂が入つたものようであつた。

帆村は青い顔をして読みつづける。

「砲声ハマスマス激シサヲ加エテイツタ——」

「砲声」というと、人造人間はユラユラと三步前進してとうとう室の中央へ出てきた。一座は鳴りをしずめ、片隅に互いの身体をピッタリより添わせた。

「墨汁ヲ吹イタヨウニ、砲煙ガ波浪ノ上ヲ匍ツテ動キダシタ」

何にも動かぬ。

「重油ハプスプス燃エヒロガツテユク」

「重油」——という所で、人造人間はクルリと左へ向いた。

「砲弾モ炸裂スル。爆弾モ毒瓦斯ガスモ……」

「爆弾」——というと、人造人間はツツと駛はしつて、博士の寝台のすぐ前でピタリと停つた。これを見ている一同の顔には、アリアリと恐怖の色が浮んだ。

「……恐ロシイ爆音ヲアゲテ、休ミナク相手ノ上ニ落チタ。的まとヲ外はずレテ落チタ砲弾ガ空中
高ク水柱すいちゆうヲ奔騰ほんとうサセル。煙幕えんまくハヒツキリナシニ……」

うわーッ。

一同の悲鳴。「煙幕」というところで、人造人間は鋼鉄の太い右腕をふりあげて、エイヤエイヤと寝台の上を打つのであった。大江山課長の制帽は、たちまちクシヤクシヤになつて底がぬけてしまった！

帆村はなおも落ついて先を読んだ。「烈風れつふう」「激浪げきろう」「横転おうてん」という三つの言葉が出る、人造人間は別々の新しい行動を起し、遂に「撃沈げきちん」という言葉を聞くと、すっかり元どおりに函の中に収つてしまった。

ハーツ。一同は期せずして大きな溜息ためいきを揃えてついた。

「……帆村君、ありがとう。君の実験は大成功だよ」

と、雁金検事が夢からさめたように云った。

「いや、恐ろしいやつは、馬詰丈太郎です。彼は博士の熟睡時間をはかって、こうして人造人間に殺害させたのです。人造人間操縦の暗号言葉を巧みに織りこんだラジオドラマを自作し、ラジオでもって人造人間に号令をかける。なんとこの素晴すばらしい思いつきでしょう。しかしこれもきょう電話で雁金さんが僕に暗示を与えて下すったので、発見できたのですよ。貴官はやつぱり玄くろうと人中の玄人ですね。いやとても僕なんかの及ぶところではありません」

と帆村は真実心からの敬意を表したのであった。

馬詰丈太郎が伯父を殺したわけは、ウララ夫人に対する邪恋を遂げるばかりではなく、博士の財産も自由にするつもりだったという。彼は事実、株に失敗して、某方面に一万円を越える借金に悩んでいた事が取調べの結果分った事である。

ウララ夫人は一年のち、東京を去った。どこへ行ったのか、ハッキリ知る人もなかったけれども、丁度ちやうどそのころサンタマリア病院の若きマクレオ博士もそこを辞して、帰国の

途とについたということである。

問題の人造人間は、事件後某所に監禁せられたまま、それつきり陽の目を見ないという噂であるが、この監禁というのは何処にあるのか、誰も話してくれる者がいない。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「オール読物」文藝春秋

1936（昭和11）年12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人造人間事件

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>